エスニシティーと階級

―フィジーの事例から―

春　日　直　樹*

CLASS AND ETHNICITY : IN CASE OF FIJI

Naoki KASUGA

序

本論はエスニシティーと階級（class）の関係について、これを現代フィジーの足跡をつうじて考察するものである。両者の関係を検討したこころみの多くは、ほとんどが二つのいずれかに分析上の力点を置くという結果になっている[1]。本論がおこなうのは、エスニシティーと階級のそれぞれの固有性をあくまで重視しながら、両者を対等な次元で論じつづけるということである[2]。

このため分析はまずエスニシティーについていえば、文化主義をさけて文化の客体化や戦略化の側面に注目しつつ、政治経済的な背景の把握をこころみる。エスニック・グループの形成とは、何らかの政治経済的な文脈の中で、「本源的（primordial）な感情」[3]が特有の言説により想起される過程としてみなされるわけである。一方階級についていえば、階級還元論に陥らないために、概念についての次の二点からの再考をふまえて出発する。

その第一はトンプソンのいうように、階級形成を政治経済的過程としてだけでなく、同時に文化的な過程としてとらえ直すことであり[4]、階級の存在を特定の文化と結びつけて検討することである。このときエスニックな関係と階級としての関係とは、文化と文化の対等な次元で対峙しあうもの、として理解されなければならない。

第二はさらに根元的な問題で、階級形式と階級意識の形成とを同一視するオーソドックスな立場（トンプソンとて例外ではない）への決別によって生まれる[5]。階級意識をもたない階級文化がたとえば本論の以下で論じる中産階級のようにみいだされる一方、階級文化に基礎づけられない階級意識が、エスニックな文化や半エスニックな文化に支えられて形成されている。階級意識と階級との分離は、階級という言葉に付与されてきた二つの別な観念をあらわにしてくれる。〈実体としての階級〉および〈言説としての階級〉というそれである。

〈実体としての階級〉[6]は政治経済的関係と文化を基礎に抽出され、〈言説としての階級〉は、自己と他者を階級という言説によって対比し形づくるときに現れる（この階級が階級意識として登場する階級をさすことはいうまでもない）。ここで〈言説としての階級〉をエスニック・グループから隔てるのは、ただ言説の違いにすぎない。階級とエスニシティーとは、言説というもう一つの対等な次元を設定されるのである。この場合に階級還元論的な説明は、どち

平成２年９月29日受理　*社会学部社会学科

らの言説がどのような文化を基礎に形成されるかを、〈実体としての階級〉からすべて明らかにしないかぎり、決して成功したとはいえないだろう。

本論は以上のような問題意識にもとづいて、フィジーにおける階級の形成を文化と結合させつつ、一方で階級意識と切り離してとらえながら、エスニシティーとの関係づけをこころみることにしたい。階級文化とエスニックな文化、また階級的言説とエスニックな言説については、最後の章で考察を展開することにする。

Ⅰ．エスニック・グループの歴史と関係

フィジーのエスニック・グループとしては、土着のフィジー人・ロトゥマ人の他に、移民としてやってきたインド人、中国人、それにソロモンやニューカレドニアなどからの南太平洋の諸民族を上げることができる。この中でもっとも注目されるのがフィジー人とインド人で、両グループは全人口の約95％を占めており(7)、政治・経済・文化などの諸領域でそれぞれ重要な役割をになっている。二つのグループの対立関係はとりわけ1987年、フィジー人ランブカ中佐（当時）が起こしたクーデターによって一躍知れわたるところとなった。本論がこれから問題にすえるのも、このフイジー人とインド人の関係である。

両グループの関係は、インド人の第一次移民がサトウ・プランテーション労働のために到着した1879年に始まる。以来インド本国の反対運動もあって移民が中止となる1916年までの間、インド人約60,000人が５年契約の労働者として上陸し、そのうち40,000人が期限後フィジーにとどまる道を選んでいる。彼らの多くは借地農としてサトウキビ畑を耕しつづけ、現在までフィジー経済の根幹ともいえるサトウ産業を支えてきている。

ただインド人はこうした年期契約の労働者ばかりではなかった。インド人人口が増加するにつれ、いわゆる自由移民と呼ばれる人々がやってきた。グジャラートやパンジャブなどから集まった彼らは商業を中心にみるみる頭角を現し、先住の成功組と拮抗しながらフィジーの一大勢力を形成していった。こうして彼らを加えたインド人は人口においても1946年にフィジー人をしのぎ、やがては過半数を占めるに至っている。

フィジー人とインド人の今日までの関係は、両者の出会いの時点ですでにその基本が形づくられていた。インド人労働力はフィジー人労働力の補足として供給されたのではない。彼らはフィジー人の文字どおりの代替であった。このことは植民地政府がフィジー人の保護と彼らの「伝統」維持とを基本方針にすえてきたことを考えるなら、当然の帰結といえる。そしてこの基本方針とは、フィジー人を自給自足的な村落経済に閉じ込め、彼らのチーフをつうじて統治するという、いわばもっとも「安くつく」支配理念に立脚したものであった。いずれにせよ、統治者が去り独立国家となったフィジーには、二つの経済世界に生きる二つのエスニック・グループが残されることになったのである。

独立を前にしたフィジー人が、将来を危惧したのはいうまでもない。独立はイギリスにとっては割のあわない植民地を切り捨てることであり、またインド人にとってはそのイギリスのフィジー人優遇策の終焉を意味していた。両者が積極的に独立を推進していく中で、フィジー人のほとんどがこれに反対をつづけた。彼らが独立と引き換えに要求したのは、植民地政府によって保障されてきた特権の維持であり、またこの特権の存続を新国家において保障する法律であった。彼らの要求の根幹が受け入れられると、フィジーは1970年の独立を迎えることになった。

独立のための先頭に掲げられた要求とは、現状の土地制度の固持だった。これによって全土の87％は、フィジー人が永遠に売却不能なまま所有する土地になった。所有の代表的単位は「マタンガリ（mataqali）」と呼ばれる氏族であり、このマタンガリはフィジー人全体を網羅

しながら、大氏族へそして氏族連合へとつらなる重層的ヒエラルヒーの基底を構成している[8]。ここでこうしたヒエラルヒーに裏打ちされて、彼らの別の要求であるフィジー人行政の存続が可能となった。大チーフ会議を最高決議機関にすえたフィジー人だけの行政の維持によって、フィジー人は独立後「ふたつの政府をもつ」とさえいわれるようになっている。

ただもうひとつの政府に関する彼らの要求は、ついに受けいられないままに終わった。首相を常にフィジー人から選出する保障、および下院立法府でフィジー人の多数議席を確保する保障がそれである。フィジー人とインド人の議席数は22対22の同数とさだめられ、フィジー人の多数性は残り8議席の割り当てを受けた他の小エスニック・グループ（'General Elector' として分類されている）からの支持、そしてインド人内部からの支持者によって保たれなければならなくなった。

とはいえこの国家レヴェルでの政治の不安は、決して外見上ほど深刻なものではなかった。フィジー人の土地や行政上の特権は、憲法にしるされた議員の構成規定によって絶対といえるほど変革不可能であったし、政情の安定を望む General Elector や一部のインド人がフィジー人寄りの政党を支持しつづけるために、フィジー人は国会においてほぼ確実に多数性を維持することができたのである。

II．分離・出会い・連帯

フィジー人とインド人はそれぞれ、相手に対して敵対的なイメージを発達させてきた。フィジー人からみれば、インド人は抜け目ない守銭奴で尊大かつ攻撃的な人間であり、一方インド人の目に映るフィジー人は田舎者でまたどうしようもない怠け者である。しかし両者が個々人のレヴェルで深い交流を経験するということは、第二次大戦前まで実際にはほとんどなかった。フィジー人の活動空間はたいてい自分の村の周辺にかぎられていたし、インド人は村の外または都市に居を構えてそこを生活拠点にしていた。交流はわずかに都市在住のエリートフィジー人（大半がチーフ階級）と、インド人の上層との間にみられるだけであった。

この時代の階級構造をエスニック・グループとの関係でみるなら、両者の対称性を指摘せざるをえない。つまりフィジー人とインド人とは、階級的にもほぼ確実な分離状況に置かれていたといえる。前者は共有地で焼畑をつづける自給自足的農民であり、後者の多くはその共有地の一部を借りて市場向けの農業を営む企業的農民、あるいは小商店主、肉体労働者たちであった。つまり両エスニック・グループは文化や生活空間をたがえるだけでなく、経済的な利害関係においても（少なくとも表面的には）対立状況に置かれていたのである。

この状況に変化があらわれだしたのは、50年代になってからであった。それはインド人に対抗しうるあたらしいフィジー人の育成が、独立をにらみながら唱えられ始めた時代であり、また彼らの「伝統」の変革が主張されようとした頃でもあった[9]。やがてフィジー人は都市への移住規制をとかれ、一方都市では当時の好況を反映して種々の仕事が生まれていったので、都市への本格的な人口移動が首都スヴァを中心にすすんだ。

都市への移動はもちろん、インド人の側にもさかんになっていた。両グループの移住者たちはエスニシティーの差異に関係なく、ひとつの地区、ひとつのアパートにごったに居住する場合が多く、それまで体験しなかった直接的交流の機会を与えられるようになった。ただ交流は何より、彼らの互いの職場をつうじて結ばれ発展していった。フィジー人とインド人の分離は、今や都市労働者の間で変容しようとしていたのである。

このことを象徴するのが、1959年の多民族的な大ストライキだった。それはスヴァの総合労働組合が決行したもので、やがてフィジー人・インド人双方による外国資本排斥の暴動へと発

展した。政府は参加者を武力で威嚇し、両グループの分断をはかる作戦にでた。組合を細分化し、しかもエスニック・グループ単位に再組織するというそれである。さらにフィジー人に対しては彼らのチーフをつうじて監視を強化し、原住民としての特権剝奪をちらつかせてみせることも忘れなかった。

以後、労働運動とまた両グループの連帯とは、しばらく停滞といえる時期に入る。しかし都市化や産業化の進行が止められないように、両グループの結びつきをとめることはできなかった。1972年にスヴァでおこなわれた調査では、フィジー人・インド人の約7割が自分の親友たちの中に、同じ職場の別なエスニック・グループの人間を加えており、その上両者とも互いをもっとも多く選出するという結果がでている[60]。こうした親交の発展とともに多民族的組合がふたたび結成されていき、労働運動は独立を直前に再び大きな力になろうとしていた。ただしここで重要なのは、運動とそれを担う人々とが以前と比較すると、だいぶ性格を異にしているという点である。

フィジーの労働運動は従来、サトウキビ農民や炭坑労働者といった人々が主役ををつとめてきた。ところが独立前に結成され拡大した組合は、たいてい公務員・教員・技術者あるいは事務労働者などいわゆるホワイトカラーを主体とするものに変わっていた。70年代に入り独立国家フィジーにおける労働運動のリーダーとなるのは、こうしたあたらしい組合だった[61]。

この変化には幾つもの理由を探すことができよう。ただ本論がまず注視したいのは、上記の職業が他と較べてエスニシティーの境界をはるかに越え易くしている、という特徴である。たとえば前記の調査では、エスニック・グループの間の交友はこういった職種においてほど明らかに深いものになっている[62]。確かにホワイトカラーと呼べる職種では、比較的長期の安定した人間関係が保障されており、また仕事上も密度の濃いコミュニケーションが要求されている。

しかしながらエスニシティーを越えた交流は、何よりこうした職種のひとびとの共有し発展させてきたライフスタイルや感覚・思考・信条によって、つまりはひとつの文化をつうじてはぐくまれたものである、ということを忘れてはならない。それは独立国家フィジーにとっての、あらたな文化の誕生である。と同時に、その文化の担い手たるあたらしい階級の出現である。本論は以下において、この階級を「都市中産階級 (urban middle class)」としてとりあげ、他の階級との関係や国家における位置を考察しながら、現代フィジーのエスニシティーについて記述していきたい。

III. 中産階級の成長

中産階級、それは定義が困難でしかも階級らしくない階級とされてきた。加えてこの階級は、資本家と労働者という二大主役の影に隠れたまったくのわき役にすぎず、しばしば「歴史的使命という意味では、何の興奮も導きも歪曲も与えてくれない」[63]研究対象とみなされてきた。中産階級が脚光を浴びるようになったのは、この階級が国民文化の形成や都市文化の形成に果たした積極的役割が再評価され始めた、近年のことにすぎない。中産階級は文化形成との結合をつうじ、また逆に意識形成との分離によって、はじめて確かな姿をあらわす。というのもそれは、たいてい彼ら自身の階級性を否定したところに、しかも文化としてのこの上ない確かさをもってあらわれたものだからである[64]。

フィジーにおける彼らの存在は、少なくても上に述べた50年代にはすでに顕著なかたちでみいだすことができる。行政や教育・経済の整備や拡大を背景に、都市で急増しだしたホワイトカラーたちがそれである。白人や一部のインド人をのぞけば、彼らは文字どおり都市に根をはやし始めた最初の人間たちであった。しかもフィジー人の多くは、かつて兵役や港湾労働以外

に自分の土地を離れられなかった平民たちによって構成されていた。彼らは高等教育をおさめ、インド人と対等にわたりあい、しかもチーフたちへのこの上ない忠誠を示すはずのあたらしいフィジー人であった。

中産階級の成長は、独立後とりわけてめざましかった。そしてこの階級は今日に至るまで、エスニシティーの差異をこえる特有のライフスタイルを発展させている。彼らはたいてい郊外に持ち家を所有し、自家用車かバスで都心の職場にかよっている。家はほとんど、安定した高収入を支えにローンで購入される。3ＬＤＫないし4ＬＤＫのブロックと漆喰の建築で広い庭をもち、二階屋の場合には一階がガレージと女中部屋にあてられている（ただし女中を雇う家庭はそう多くない）。

こうした幾つもの部屋のある暮しは、村ではまず考えられない。そもそもフィジー語には従来、「部屋」という言葉さえなかった。彼らはひとつの空間を物理的に分断せずに区分しながら、各自のふさわしい場所をそのときどきで使用する。男性か女性か、年長者か年少者か、チーフか否か、によって場所は容易に認知することができる。しかも扉のひとつはつねに開けられていて、通りがかりの人間を呼び止め「どこにいく？」「どこにいった？」と聞いたり、立ち寄るように誘ったりするのがふつうである。こうした慣習は都市にきても残される場合が多く、たとえばアパートや小さな家の建て混んだ地区では、人々は住まいを事実上一部屋として使いながら、隣人たちとの親しいつきあいを維持している。

この点郊外にあらわれた家々は、あたらしい隣人関係とまたあたらしい家族関係のあり方に呼応している。つまり家族と個人のプライバシーを重視し、自分の家・自分の部屋にやすらぎをみいだそうとするあり方にである。

中産階級は従来の生活様式とくらべると、核家族の強い結束を保っているように思える。他のフィジー人の家庭がよくやるような、給料を即座に使いきってしまうようなことはしない。彼らは家計をやりくりしながら、ローンを返済し子供を教育する。とりわけ教育の熱心さには目をみはるものがある。この階級は自分の生活が教育によってもたらされたことを誰より深く認識しており、'educated' として強い誇りをもっている。たとえば人を批判する標準的な表現のひとつは、「彼は educated でないから」というそれである。逆にいえば彼らの生活様式は、教育をうけた人間にふさわしいものとして意識され再生産されているわけである。

その教育の成果の代表ともいうべきひとつに、英語の使用が上げられる。中産階級の多くは家庭の内部においても、フィジー語と併用して頻繁に英語をもちいている。フィジー語の大切さについては誰もが強調するものの、英語を家族間で話すことは確かにひとつのステイタスの証しとして認知されているように思われる。フィジー語に存在しない用語や概念が頻繁に会話でもちいられることも、大きな要因となっている。彼らが普遍的な価値を認める「デモクラシー」「自由」「人権」「社会的正義」もそのひとつである。

教育を受けたという証拠は、こうした価値を受け入れながら大勢に流されない独自の見解と態度をもちつづけることだ、と彼らの多くは考える。それは従ってさまざまな個性の表現を許すことになる。フィジー人が sulu、インド人が sari を身につけるのは自由だし、両者が同じ西洋式の服装をするのもまた自由である。キリスト教徒か否かは自由だし、キリスト教徒が教会に礼拝するかどうかもまた自由である。ところが教育のない人間は自分自身で本当の選択をする能力がなく、つねにまわりに迎合したり上からの指令で動いてしまう、その典型が田舎の生活だ、というのである。

この階級には一方で、田舎の素朴さを賛美し、フィジー人としてのあるべき生き方の暗示をみようとする人々も大勢いる。確かに中産階級の多くは今日でも出身村落との絆を維持し、親

族に対しては決して負担の軽くない援助を与えてきている。それはマタンガリ成員としての権利を保持し、老後の自分や低学歴でおわるかもしれない子供のために、最終的な生活基盤を確保するという意味をもってきた。しかしながら村の大嫌いな人々も、また村人以上に村の好きな人々にも共通していえるのは、どちらも村の現実の暮しに適合するのがすでに困難になってしまった、という点である。実際トイレもシャワーもなく、読書の時間もひとりで休息する機会もない生活、夫婦は一緒に食事もできず、それぞれが男女の陳腐な話題に毎日つきあわされる生活に、彼らはもはや戻ることができない。彼らの子供についてはいうまでもないであろう[19]。

こうしたまったくあたらしい文化を形成しつつ、村との間に溝を深めていった彼らは、しかしながら職場や居住区において自分と同類のインド人たちをみいだし親交を結ぶことができた。彼らは互いを、週末の自宅のパーティーや結婚式など儀礼の場へと呼びあい、さまざまな話題に英語で花を咲かせた。インド人とフィジー人の縁組というきわめて特異な現象が、スヴァでは71年だけで10組も記録されている。フィジー人対インド人というエスニックな言説は、あたらしいフィジー人、あたらしいインド人の出現によって、何らかの変容を余儀なくされ始めたのである。

Ⅳ. エスニックな言説の過激化

この変容の必然は、フィジー経済が不況に見舞われる70年代後半まで、さし迫ったものにはならなかった。たとえば政党政治をみるかぎり、支配政党の同盟党（Alliance Party）は持続する好況を背景に、フィジー人の8割以上、インド人の4分の1の支持を得つつ政局の安定を誇示していた。この政党はフィジー人に対しては特権の保護、インド人その他に対しては穏健な多民族主義をかかげて、広い支持基盤を確保することに成功した。それに対し当初労働者の利権問題に力点をおいて訴えた連邦党（Federation Party）は、次第にインド人だけの党とみなされて、他のエスニック・グループからの支持をほとんど獲得できなかった。

中産階級ではフィジー人はもちろんインド人の多くが、この同盟党を支持していた。ただし積極的な支持姿勢というより、他と比べて一番妥当な党という理由で投票した者がかなりいたと思われる。彼らは決して全員が熱心な労働組合員というわけではなく、その所属する組合もまた政府との対決よりも協調を基本とする方針をとっていた。組合リーダーの中には政府のトップポストにつく者も現れるという状況で、同盟党同様に穏健な路線を堅持していたのである。中産階級は好況を支えに急成長しながらも、その現状肯定的態度によってしばらくは存在を突出させずにいたといえる。

こうした状況はやがて、石油危機や主産物サトウの価格急落によって経済状態が急変し、同盟党人気に影がさし始めたとき転換せざるをえなくなった。転換はまず、不況の波をまともにかぶった臨時雇いの労働者層にあらわれた。それはインド人の場合には主に都市の下層住人を意味するが、フィジー人の場合にはまったく違う種類の人間をさしている。彼らは都市住人というより、農村に基盤をおく人間たちである。都市にはささやかな足場を確保するだけで、出身農村との絆の方を重視し、金をためて将来は当然帰村するものと考えている。あるいはまた出稼ぎ労働者として、農村に文字どおりの拠点をおいている。フィジーの農村の暮しは60年代からの急速な都市化・商品経済化の中で、こうした人々が主役となって支えてきている。彼らは現代の標準的フィジー人と呼んでもおかしくない。

したがって転換は、インド人とフィジー人の下層労働者では違ったかたちで出現せざるをえなかった。インド人は都市労働者型の政党で、もともとインド人主体に組織された連邦党への

支持を広げた。一方フィジー人は農村の利益、フィジー人の利益を第一に掲げる急進的政党を欲していた。それは同盟党の穏健路線と袂を分かったブダンドロカの組織するFNP（Fiji Nationalist Party）への支持となってあらわれた[06]。いうなら両グループは不況への直面をつうじてその階級的でエスニックな差異をあらわにし、ともに同盟党の多民族主義から民族主義的路線への傾斜を強めたのである。

ここでもうひとつ、不況を背景に顕在化した対立の枠組みがある。西部フィジー人対東部フィジー人というそれである。早くから階層社会を形成し、白人に近づいてキリスト教や火器をとりいれた東部、また植民地化ののちは大チーフたちを中心にさまざまな優遇措置を授かってきた東部に対し、平等性の強い西部社会はしばしば、チーフを強調する植民地支配の体制に抵抗し、東部からの行政官によって統治されねばならない結果に甘んじてきた。フィジー経済を支えるサトウキビも金鉱もまたあたらしい観光業もすべて西部が担ってきたのに、こうした主要産業のほとんどは白人と東部のフィジー人チーフの手に握られているのだった。

西部と東部の対立はこれまでも幾度か顕在化し、西部人の利益擁護を掲げる政党が結成されたことがあった。しかし今回旗揚げした西部共同戦線WUF（Western United Front）は多くの選挙区に候補者を立てて、フィジー人票の亀裂を明らかに狙うものだった。

こうした状況の中で、中産階級の多くは依然同盟党支持を貫いていた。ただしその支持姿勢はより消極化することはあっても、積極化したとは考えにくい。77年春の選挙は、都市フィジー人の投票率の低さが特徴のひとつになっているからである。ともあれ民族主義の高揚、フィジー人内部の分裂、そしてこの低投票率によって、総選挙は驚くべき結果を生むことになった。同盟党の議席激減と、連邦党の半数到達である。

ところがインド人政権の誕生が確実となったとき、組閣をめぐる内部抗争が起こった。それはインド人の間にくすぶっていた宗教や出身地域による対立が、皮肉にも彼らがフィジー人内部の対立を利用して勝利したそのときに、顕在化したものだった[07]。連邦党がついに組閣できず、議会の解散と再度の総選挙が秋におこなわれると、いわゆる同盟党の 'protect voter' が大挙して連邦党を押し戻す結果となった。同盟党の逆転大勝利をもたらした彼らの大部分は、春の選挙に棄権しあるいはFNPを支持したフィジー人たちだった。

フィジーの経済不況はその後長期化し、国家財政も悪化の一途をたどっていく。それはまた両エスニック・グループの関係悪化を意味していた。同盟党と連邦党の二大政党はともに党首たちの意志に反して、それぞれフィジー人の党、インド人の党という期待を集め、内部に極端論者の台頭をまねくようになった。同盟党の変わらぬ党首であり首相であるラトゥ・マラ、そして連邦党の内紛を制し党首となったレディは、ともに事態がこのまま進展すれば暴力的結果をまねかざるをえないと危惧していた。ただそのラトゥ・マラもまた、農村の結束と自力救済のためにはフィジー人の「伝統」をますます強調せざるをえない状況だった。中産階級の多民族主義的で穏健な姿勢は、労働者や農民たちの貧窮化意識が深まる中で次第に少数派となりつつあったのである。

V．階級的言説の急進化

とはいえ中産階級はやがて、過激な民族主義者よりもある意味でずっと危険な思想の温床たりえることを証明するようになった。その思想は基本的には、エスニシティーの代わりに「階級」を主役に据えるというオーソドックスな言説を継承したもので、80年代に彼らの労働組合を母胎に急成長していく。この主導的役割を演じたのは、ホワイトカラー系組合の中核Fiji Public Service Association、すなわちFPSAである。

FPSAつまりフィジー公務員労組は、上述のように政府との協調路線を旨としながら、独立後の組合運動のリーダー役をつとめてきた。とりわけ不況が深刻化した70年代後半になると、FPSAの委員長は全労組の代表として、政府役人・雇用主同盟との三者フォーラムにのぞみ、毎年の賃金のガイドラインを決定した。いうなら組合は不況の中にあって、政府と労組とをつなぐ重要なパイプとなったのである。

FPSAがこれだけ大きな力をもつに至ったのは、決して偶然ではない。公務員は国家の全賃金労働者の4分の1を構成しながら、しかも民間よりもはるか高水準の賃金を手にしている（フィジー中産階級の代表的な職種といえる）[08]。FPSAはそうした彼らをほぼ全員加入させることによって、人数と財力において圧倒的な立場を築いてきた。不況が運動の集権化をうながし、政府との折衝を主な舞台とするようになると、この組合は否応なしに先頭に立つようになったのである。

しかしながらFPSAの穏健さは、そのまま中産階級の穏健さと重なっている。それは他の労働者よりもはるかに恵まれた地位に依拠した穏健さであり、またその地位の保障を要求しつづける穏健さである。政府がとったのは彼らのこうした穏健さを維持させて、労働運動全体を協調路線にとどまらせておくことだった。FPSAの要求を最大譲歩して受け入れながら、政府は不況の中で穏当な労使関係を80年代初期まで何とか維持することができた。とはいえこの戦略は不況の長期化と財政の悪化によって、ついに限界にぶつかることになった。支出の45％を彼らの賃金にさき、なおもインフレの穴埋めのベースアップを強く突きつけられたとき、政府はまざまざとFPSAに力を与えすぎたことを後悔せねばならなかった。

82年はまさしくそうした転換の年といえる。政府側ははじめて賃金凍結という非常事態を宣言し、各労組に受け入れを迫った。経営悪化による大量解雇をおそれたブルーカラー系の組合が、この勧告に従った。FPSAが拒否したのはいうまでもない。銀行などホワイトカラー系の他の組合もこれにつづいた。

FPSAへの姿勢を硬化させた政府はしかしながらこの時点では、組合が一挙に急進化すると予想しなかったと思われる。実際運動員の多くは80年代に入るまでは同盟党の支持者であり、フィジー国家建設の中核的存在であると自覚していた。ただし彼らが政府のスタッフや同盟党の議員たちと違うのは、チーフの家系でなくみずからの教育を武器にしてめぐまれた地位を獲得した、という点だった。彼らは先に述べたように、インド人と対等にわたりあうよう期待されたあたらしいフィジー人であり、また植民地体制の中で確立したフィジー人の特権的世界、つまりはチーフを頂点としたヒエラルヒーを守っていくべきフィジー人だった。問題はただ、彼らが一方で都市を拠点としつつフィジー人の「伝統」自体から乖離する、という矛盾を背負っていることだった。

FPSAの急進化は、そうした彼らの内的矛盾がついに表面化した結果とみることができる。そして彼らは政府との交渉決裂の過程で、みずからの矛盾を止揚すべきあらたな言説を顕在化させていった。インド人とフィジー人、都市と農村、「伝統」と進歩といった深い対立は、実は両者にまたがりその対立に寄生しつつ私腹を肥す、という一部の階級によってかき立てられたものでないか。この特権階級をのぞけば、残るのは貧しく誠実な働き手ばかりのはずだ[09]。

この認識が従来の労働運動と較べてもつ急進性とは、労働者の敵としてフィジー人の特権チーフたちをはじめて同定した点にある。チーフ階級のヘゲモニーと衝突した中産階級の運動家たちは今、誠実で貧しい働く者すべての代表として彼らに対峙することになった。

こうした急進化に積極的にかかわったフィジー人たちの多くは、彼らの転向が同盟党と大チーフたちへの幻滅によってもたらされたことを指摘する。大チーフたちが「伝統」の名のもとに

いかに私的利益を追求し、とりわけ外国からの多額の援助を食い物にして利権拡大をはかってきたか。あるいは部族的ヒエラルヒーやpatron-client関係を利用しつつ汚職を構造化させてきたか。さらにはインド人との対立を意識させながら、みずからは相手の上層部との結託をはかってきたか。自分は職場であるいは友人をつうじて、彼らの実態を知り立場を変えたのだ、というのである。

転向がはたして「真実」を知ったためだったかどうかはわからない。この種の話は、以前からもしばしば語られてきている。ただ確かなのは彼らが今やはっきり自分のチーフを批判し、これを階級的な言説によって論じ始めているという点である。このあらたな動きはついに賃金凍結が強行された翌年の85年、フィジー労働党（Fiji Labour Party）という新党を生み出した。「社会民主主義」の名のもとに、労使関係の改善・人権擁護・汚職浄化・フィジー人行政の合理化をかかげた新党だった。しかも驚くことに結党直後のスヴァ市会議員選挙において、この党は同盟党・連邦党の二大政党をみごとに打ち破ったのである。

労働党が連邦党からの総選挙共闘を申し込まれ、自党寄りの大幅な譲歩をかちとった末に連合(Federation Party/Labour Party Coalition)を結成したのは、それから間もなくだった[60]。思いがけず政権を一挙に奪取できる状況となった彼らは、この連合の党首にFPSAの指導者で西部出身の医者ババンドラを擁立した。ババンドラの平民性[61]・西部人という属性をいかして、東部チーフ中心の体制への不満票を集めようというねらいだった。

連合の結成が中産階級の間に、懸念を生じさせたことは否定できない。彼らの多くは労働党の主張に基本的には賛同していた。しかし党は現実に政権をにぎるにはあまりに理想主義的であり、また経験に乏しい。フィジー人行政の変革はいつかおこなわねばならないが、今着手するのはいかにも時期尚早ではないか。政権奪取は混乱をまねいて事態を悪化させ、癖者政治家の再登場をせいぜい招くだけではないのか、といった懸念である。市議会選挙で労働党に投票した人々の中には、今度は同盟党を選ぶ者もあらわれた。

だがこうした懸念をよそに、連合は予想以上の支持を得て過半数を制した。それは労働党が首都周辺と西部とで集めたフィジー人票、およびインド人が連邦党へ投じた票、との合算結果としてしばしば解釈される。しかし支持票の解釈はそう容易ではない。とりわけフィジー人側の支持理由には、彼らの間の地域対立感情が間違いなく組み込まれている。労働党そして連合の結成と勝利とは、こうしたフィジー人内部の対立を浮き上がらせ、逆にフィジー人の結束の危機感をあおる結果ともなった。ことに連合政権が親インド人政権であり、新首相ババンドラがインド人の傀儡である、という主張には説得力があった。危機意識の高まりが反政府デモを活発化し、そのデモがまたフィジー人同士の亀裂を深めるという悪循環の中で、ついに軍部のクーデターが発生したのである。

クーデター後のフィジーがいかに多くの紆余曲折をへて現在に至っているか、このことを詳細に論じる余裕は本論にはない。ただフィジーがたどった危なげな針路は、クーデターの首謀者ランブカ中佐（当時）が平民出身のハンディを背負いつつ、いかに最大限の野心実現をはかろうとしたか、あるいははからねばならなかったかを考えるとき、大筋を明らかにする。

ランブカが利用したのはフィジー人の危機意識であり、この危機を彼らの「伝統」つまりは既得権益の一層の強化をつうじて克服するよう非常手段に訴えるという図式だった。だがこの「伝統」主義によって、平民の彼はみずからにきびしい限界をはめてしまう。彼にできたのはあくまでチーフ階級に仕える一戦士としての役割を演じることであり、チーフに一層の力と権威を与えてみせつつ、それと引き換えにこの階級から最大限の報償に授かろうとすることだった。結局彼は大将への昇進を手にし、内閣を以前の同盟党内閣のスタッフにゆずり、軍へと帰っ

ていった。残ったのはチーフたちの立場の強化と「伝統」への一層の傾斜である。

現在フィジーでは国政レヴェルでフィジー人の永続的支配が強権的に確立される一方、フィジー人行政の復古的な強化が進められている[24]。こうした動きを「民主主義」や「平等」の立場から批判する者は、フィジー人の伝統にも同様な性質の内在することをみようとしない、西洋中心主義者として逆批判される。都市在住のフィジー人は事実上の公民権を奪われ[25]、かわりに原住民としての永遠の安全を手にいれたのだと説得される。フィジー人によるフィジー人のための国家という理念が掲げられ、チーフは神の選べし人々だという発言が新聞の一面を飾るありさまである。

しかしながら少なくとも中産階級と呼びうる人々に関するかぎり、この方向が積極的に支持されていると言い難い[26]。彼らの懸念が現実となり同盟党の大物政治家が再登場すると、同盟党への反発ははるかに強いものとなってしまった。同僚のインド人が海外へ移住するのをみつめつつ[27]、彼らはしばしばフィジーの将来について、明るくない展望を論じ合うのである。

結　論

本論は階級を文化と結合させ、また階級意識と切断してとらえ直すという立場に立ちながら、現代フィジーにおけるエスニシティーとの関係を追ってきた。ここにあらわれたのは、みずからの存在については黙ったまま、しかし独自のあたらしい文化を国家の形成とともにつくりあげてきたひとつの階級、つまり都市中産階級の姿であった。この階級のもつ普遍主義的志向、家族と個人のプライバシー重視、学校教育の尊重、自己規律といった特徴は、従来の近代国民国家の基礎ともいえる重要な特質である。フィジーもまた近代国家としての姿を整えるにおよび、こうした文化とその中核的担い手とを育てねばならなかったし、育て上げてきたのだった。

けれども中産階級は現在、フィジー人対インド人というエスニシティーの言説が勢いをまし吹き荒れる中で、順当な発達を抑えられている。この言説は彼らのある者が提起しまた多くの共感を獲得するところとなったもうひとつの言説、つまり支配階級対被支配階級というそれ、に対抗した古い言説であり、フィジーは今日このふたつの対立する言説の間で揺れつづけているといえる。

エスニックな言説と階級的な言説、両者はいかなる状況で形成されまた関係しあうのだろうか。エスニックな言説は文化を前提に「本源的な感情」を訴え、階級的な言説は支配や搾取を前提にして政治経済的な関係を喚起する。そしていずれも、《我々》対《彼ら》、「味方」対「敵」という対立を現前させたとき成功とみなされる。ただここで、ふたつの言説は対立図式の創出という同じ効果を争うかぎりで確かに競合的であっても、逆に相手の要素をとりこみ図式自体の強化をはかろうとする場合には相補的となりうることを忘れてはならない。実際フィジーについてみるかぎり、言説の成功は決してそれ自身で単独にもたらされたものでない。むしろ成功は相手側の前提要素によって支えられ、保障されてきたのである。

たとえばエスニックな言説についてみよう。フィジー人対インド人という図式は、植民地時代のように両者が階級としてほぼ完全に分断されていたとき、十分な力を発揮した。現代でも生活基盤の土地を確保したフィジー人とそうでないインド人との間には、とりわけ二者の差異があらわとなる不況下で対立感情が高揚している。だが反対に同じ階級を構成するインド人とフィジー人の間では、この言説は支配的になりにくい。資本家階級そして中産階級がこれにあたる。とりわけ中産階級の成長は、政府がとってきた労働運動のエスニックな分断を、少なくともホワイトカラーの組合について意味の乏しいものにしてしまった。エスニックな言説はこのように、一程度の階級的実態に裏付けられてはじめて力を発揮するのである。

階級的な言説はどうだろうか。この言説は階級文化、エスニックな文化、あるいは半エスニックな文化などの、いずれにせよ何らかの文化を支持母体にして受容されている。「本源的な感情」ほど強烈でないかもしれないが、何らかの同胞意識を喚起する文化の力によって、はじめて受け入れられるのである。たとえはこの言説をはじめから強調してきた連邦党は、インド人というエスニック・グループの支持政党に変わってしまった。一方新党の労働党の言説は、都市中産階級および西部フィジー人など階級文化や地域文化を共有する者によって、それぞれ《彼ら》への対抗的言説として歓迎され受け入れられていったのである。

結局両言説の戦いは、相手側の前提要素をいかに自己の内部にとりこみながら、《我々》対《彼ら》の図式の強化をはかっていくか、という過程として表現できる。つまりエスニックな言説にとってはある種の階級的対立を、反対に階級的言説にとってはひとつの文化的対立を、自己の裏打ちとしてつかみとることが決定的な条件となる。このことは言い換えれば、階級の裂け目にエスニックな言語で割って入り、また文化の裂け目に階級的言語で割って入ることであって、相手の内部の裂け目への割り込みとして表現してもよい。

しかしながら、戦いの未来を予測することは誰にもできない。たとえば東部フィジー人対西部フィジー人という半エスニックとさえいえる対立ひとつをとってみても、この対立が将来エスニック・グループの関係として語られるようになるか、あるいは支配－被支配の階級関係として語られるかは解答不能な問題である。階級と文化の諸側面をどう読みどう語るか、このことに絶対的・普遍的な答えはないのである。

ここで本稿の最後に、両言説の戦いを規定するもっとも大きな外的枠組み、すなわち国民国家について言及しておきたい。言説の戦いがつねに国家を舞台として展開される以上、この枠組みとの妥協が何らかの形で達成されなくてはならないのは明かである。

独立後のフィジーをみるかぎり、エスニシティーと階級とは国民の一体性という至上命題の下に、ともにそれぞれの言説の過剰を抑圧されてきた。このことは同盟党の政策に端的にみてとることができる。階級的言説の過剰を抑えるべくエスニックな労組が支援される一方で、エスニックな言説の勢いづいた近年では三者フォーラムという多民族的な労使協調制度が創出されている。そうした路線を支持する典型に、都市中産階級が上げられるのはいうまでもない。近代国民国家の形成の中核たるべきこの人々は、国家のスムースな形成過程にこそ、みずからの利益のあることを十分認識していたのである。

だが両言説のバランスは、うち続く不況の中で失われてしまった。臨時雇いの労働者を中心にエスニックな亀裂が深まり、その一方で支配階級との対立意識を高めた中産階級を中心に階級的言説が急進化すると、同盟党の政策はいずれの側からも激しい批判を浴びるようになった。労働党の結党と勝利、そして連合の結成がいよいよ両言説の対決を決定づけたとき、階級的言説の母体＝中産階級の中から再び多くの同盟党支持者があらわれたことは興味深い。それは対決が混乱とさらには国民国家の危機をまねくのではないかと危惧した彼らが、当面の自己利益を捨て国家の利益の側に立って、特権的地位の長期的な維持をはかろうとした姿勢として理解することができる。

しかしながら対決は、連合の勝利ののち完璧に泥沼化していった。両言説に対する国家の調整能力がいよいよもって失われていくと、瀕死の国家に非常大権を付与してこれを甦えらそうとするこころみ、すなわちクーデターが起こったのだった。ただしその国家とは一方の言説の上に強引に君臨し、原住民の特権を主軸として構成されるあらたな形態の国民国家である。この国家の依拠する特異なナショナリズムとは、言説の対決がフィジー人の多くにほとんど初めてともいえる国家意識の高揚をもたらしたそのとき、形成された思想に他ならない。この場合

に国家がみせる正統派の国民国家モデルからの乖離状況は、そのまま後者の中核たるべき都市中産階級の苦境を物語っているといえよう。

ともあれエスニシティーと階級、このふたつの言説の戦いは今、独立まもない近代国家フィジーを危機に陥れながら、国民国家の形態という重大な問題を提起してみせているのである。

註

(1) その典型はオーソドックスなマルクス主義的分析で、たとえばメラネシアに関するものとしては、FITZPATRICK (1980)、HOWARD (1986)、DURUTALO (1986) など。ただ STAVENHAGEN (1975) の 'internal colonialism' のアプローチは、階級関係を重視しながらも、エスニシティーの独自性に再三注意を喚起している点で注目されてよい。ABDEL-MALEK (1981) らの 'civilization' を主軸とする分析は、西洋と非西洋の対立を強調する反面、エスニック・グループ内部や国民国家における階級関係を軽視している。

(2) 文化と階級の関係を還元主義に陥らず注視した人類学的研究として、WOLF (1982)、SIDER (1988)、ROSEBERRYなど (1989) を参照のこと。

(3) GEERTZ (1973) chap.10.

(4) THOMPSON (1966).

(5) GIDDENS (1975) 及び BLUMIN (1989) を参照。

(6) 〈実体としての階級〉という用語は、GIDDENS 1975:chap.6-2 の主張にもとづいている。この用語は人類学者の多くにとって、抵抗を感じさせるものかもしれない。しかし人類学者が安易にもちいてきた「階級」もまた、たとえば貴族・僧侶・年齢組というような、まさしく実体的な集団を指示してきたことがしばしばである。なおここでいう階級は、少なくてもこうした用法と同じ程度には、実体が関係性の中で成り立つこと、またそうした関係性が幾つもの読み取りを許すこと、を認識したものである。

(7) 人口比は1986年には、フィジー人46.2%に対しインド人48.6%であった。ただしクーデター後にインド人が多数国外流出したため、1989年の時点ではフィジー人人口がインド人人口を若干上まわっている。

(8) この土地制度と社会構造の創出については、FRANCE (1969)。

(9) フィジー人行政は1959年の Spate Commission によって批判され、この結論は翌年の Burns Commission によって支持されている。大チーフ会議は行政の改革を受け入れざるをえなくなった。

(10) MAMAK (1978:61-5)

(11) 1986年に登録されていた組合は計44で、組合員数は全フィジーの賃労働者の約半数にあたる40,000人だった。この場合、重複加入は組合法によって禁止されている。またホワイトカラー系組合の代表でかつ組合運動の中軸であるFPSAには、加入資格をもつ全員がほぼ加入していた。労働運動については HOWARD (1985) 、またあとで述べる賃金凍結については NAIDU (1987) がまとまった研究として上げられる。

(12) Op.,cit.pp.123-7.

(13) MORRIS (1990:9)

(14) こうした立場からの代表的研究として BLUMIN (1989)。フィジーの中産階級を論じた研究は、現在まで RUTZ (1989)、GRIFFIN (1986) などごく少数にとどまっている。

(15) 村の生活が好きで将来そこに家を構えたいという人間でも、問いつめればたいていがトイレやシャワーを完備した末に、せいぜい短期間しか滞在できないだろうことを認めている。

(16) この政党は西洋の植民地主義を断罪し、チーフ階級の腐敗状況を告発するという過激性をも有していた。現在では議席はないが、農村部を中心に根強い人気を維持している。PREMDAS (1980) を参照。

(17) 宗教ではヒンズ教 (80%) とイスラム教 (15%)、地域では北部インド人 (多数) 対南部インド人の対立が上げられる。抗争に破れた一派は離党し、その後同盟党に入党した。イスラム教徒の組織も9月の選挙に敗北した後は、同盟党支持にまわっている。

(18) 1985年当時、賃労働者の平均年間所得1,600F $ (フィジードル。当時1ドル約300円) に対し、公務員のそれは2,000F $から20,000F $であった。公務員組合の歴史については、LECKIE (1986)。

(19) チーフ階級は大チーフ会議を中心にフィジー人行政機構を握るだけでなく、国民国家フィジーの政府においてもトップポストを占めている。チーフ階級に対する高学歴の平民の不満については、BOLABOLA (1978)、YOUNG (1990)。

(20) 連合の結成をめぐって、労働党内部で激しい意見の対立があった。反対の理由として、連邦党が同盟党と同じ民族主義的な政党である点が上げられた。

(21) しかしながらババンドラは実際にはチーフに準ずる家系に属し、チーフの称号 ratu を使用することができる。彼はこの称号を「東部人の気どり」として拒否している。ROBIE (1989:215) 参照。

(22) 新憲法はフィジー人の議席の多数性を保障し、大チーフ会議をつうじた大統領の任命、また大統領をつうじた首相と野党党首の任命をさだめている。さらにフィジー人行政をあらためて、チーフの管轄下でフィジー人だけの裁判所を設置し、あわせて都市への移住規制を復活させている。

(23) フィジー人の国会議員は、地方議会で伝統的なコンセンサスの一致をつうじて選出されるようになった。

(24) ただし中産階級の中にはチーフ階級に接近し、よりよいポストや収入を手にいれようとする人々ももちろんいる。たとえばクーデター後に登用された政府高官のひとりは、チーフへの忠誠を誓う一方で都会的で西洋的な生活様式を身につけている。ISLAND BUSINESS (1989) 参照。

(25) 海外へ移住したインド人の多くは、こうした都市中産階級である。彼らの移住によって、フィジーは教員・医師・技術者などの不足に悩んでいる。一方公務員等の事務職については、インド人の出国はフィジー人にとって願ってもない雇用創出となった。

引 用 文 献

ABDEL-MALEK, A.
1981 *Social Dialectics*. London.

BLUMIN, S.T.
1989 *The Emergence of the Middle Class*. Cambridge.

BOLABOLA, C.
1978 Changes in Fijian Leadership. *A.N.Z.J.S.*, vol.14-2, pp.154-9.

DURUTALO, S.
1989 *The Paramouncy of Fijian Interest and the Politicization of Ethnicity*. South Pacific Forum Working Paper No.6. Suva.

FRANCE, P.
1969 *The Charter of the Land*. Oxford.

FITZPATRICK, P.
1980 *Law and State in Papua New Guinea*. London.

GEERTZ, C.

1973 *The Interpretation of Cultures.* New York. (邦訳『文化の解釈学Ⅰ.Ⅱ』吉田・柳川・中牧・板橋訳。1987年。岩波書店)

GIDDENS,A.

1975 *The Class Structure of the Advanced Societies.* New York (邦訳『先進社会の階級構造』市川統洋訳。1984年。みすず).

GRIFFIN,C. (ed.)

1986 *Fijians in Town.* Suva.

HOWARD,M.

1985 The Evolution of Industrial Relations in Fiji and the Reaction of Public Employees' Unions to the Current Economic Crisis, in *South Pacific Forum* vol.2-2,pp.106-163. Suva.

1989 State Power and Political Change in Fiji. Paper Presented to the Journal of Contemporary Asia Conference, Manila.

ISLAND BUSINESS

1989 The New Fijian Takes, No.2,pp.8-17. Suva.

LECKIE,J.

1986 Functioning of Civil Service Unions during the Colonial Era in Fiji, in *South Pacific Forum,* vol.3-1,pp.11-36. Suva.

MAMAK,A.

1978 *Colour, Culture, and Conflict.* N.S.W.

MORRIS,R.J.

1990 *Class, Sect, and Party.* Manchester.

NAIDU,V.

1987 Fiji: The State, Labour Aristocracy and the Fiji Labour Party, in Hooper,A. (ed) ,*Class and Culture in the South Pacific.* Suva.

PREMDAS,R.

1980 Constitutional Challenge: The Rise of Fijian Nationalism, in *Pacific Perspective,* vol.9-2,pp.30-44.

ROBIE,D.

1989 *Blood on Their Banner.* Wellington.

ROSEBERRY,W.

1989 *Anthropologies and Histories.* New Brunswick.

RUTZ,H.

1989 Fijian Household Practices and the Reproduction, in R.R.Wilk (ed.) , *The Household Economy.* Boulder.

SIDER,G.M.

1986 *Culture and Class in Anthropology and History.* Cambridge.

STAVENHAGEN,R.

1975 *Social Classes in Agrarian Societies.* New York.

THOMPSON,E.P.

1966 *The Making of the English Working Class.* New York.

WOLF,E.

1982 *Europe and the People without History*. Berkeley.
YOUNG, J.
1990 Development Education and Social Stratification in Fiji, in *Practicing Anthropology*, vol.12-1, pp.4-6.

Summary

This article focuses on the relationship between class and ethnicity in modern Fiji. We attempt to discuss the two in the same context of culure and discourse. Thus, class formation, for example, should be grasped as the cultural and also as making of distinctive discourse. Despite great differences between the two formations, how each becomes dominant shows important similarities; each discourse utilizes the other's elements for its reinforcement and attempts to surpass the other. In this sense, relationship of the two can be fully analized by examining their mutual complementarity as well as their incompatibility.

CLASS AND ETHNICITY: IN CASE OF FIJI

Naoki Kasuga